

星野道夫の足跡

ハドソン湾チャーナル岬

クイーンシャーロット島

1952/9/27 千葉県市川市に生まれる。

1969/7 16歳 アルゼンチナ丸でアメリカへ。2ヶ月の一人旅。

1971/4 18歳 慶応義塾大学入学、探検部入部。

1971/夏 アラスカ写真集で、シシムレフ村の空撮写真に出会う。

1973/夏 21歳 シシムレフ村に3ヶ月滞在。

1974/夏 22歳 親友を山の事故で失い、1年間閉居。

「好きなことをやっていこう」という強い思いでアラスカ行きを決意。

1976 24歳 アラスカの写真家を目指し動物写真家 田中光常氏の助手を2年間勤める。

1978/1 25歳 アラスカ大学受験のため渡米。

1978/9 アラスカ大学入学。フィールド撮影を開始。

1979/6 26歳 グレイシャーベイを2ヶ月、カヤックで旅する。

1980/夏 27歳 北極圏でカリブーの撮影。以降毎年のように北極圏へ撮影に入る。

1981 29歳 月刊誌「アニ」に「極地のカリブー 1000キロの旅」発表。

1982/2 アラスカ山脈トコシトナ氷河で1ヶ月間オーロラを撮影。

1982/4 ポイントホープ村のクヰラ漁キャンプへ参加撮影。

1985/11 33歳 トヨタ財団助成で油田開発のカリブーと原住民への影響を調査。

「GRIZZLY」シリーズ アラスカの王者」刊行。

1986/6 「GRIZZLY」シリーズ アラスカの王者」でアニメ賞を受賞。

1988 ナショナルジオグラフィックに「カリブー」発表。

1989/夏 36歳 南東アラスカで鯨と森の撮影。以降毎年のように撮影に入る。

1990/4 37歳 木村伊兵衛写真賞・受賞(週刊朝日連載「Nasab」風のような物語)。

1990/5 フェアバンクスに家を作る。

1992/3 39歳 子供達とルース氷河でキャンプをする「オーロラクラブ」を始める。

1992/11 40歳 カナダ、ハドソン湾のチャーナル岬でホッキョククマの撮影。以降毎年のように撮影に入る。

1993/5 萩谷直子と結婚。

クイーンシャーロット島トームポール撮影。

1993/11 41歳 アメリカカーネギー自然歴史博物館で写真展を開催。

1993/夏 アリュウシヤンの花 撮影。

1993/秋 ツンドラ地帯カリブー撮影。コバック川下り、ハントリバー遊上。

カトマイ国立公園 クマの撮影。

1994/6 エクアドル写真集プロジェクトの依頼でガラパゴス諸島撮影。

1994/7 カナダ・オールドクロウ村グッチンインディアン集会取材。

南東アラスカ、シトナなど植物や花の取材撮影。

1994/11 42歳 長男誕生。

1995/2 チンパンジー研究者シエン・グドールを訪ねアフリカへ。

1995/4 シトナでインディアン神話の語り部ボブ・サムと出会う。

1995/6 ボブ・サムとクイーンシャーロット島へ。

タルキートナ取材。

1995/7 シリア・ハンター、ジニー・ウッドとシーンジエック川下り。

1995/10 43歳 スウェーデン講演・家族で欧州旅行。

1996/6 43歳 ロシア チュコト半島に入り、一世紀前のような民族に衝撃を受ける。

1996/8 43歳 カムチャツカ半島クリル湖畔で事故死。

1999 日本写真協会賞・特別賞受賞。

この色は星野直子が同行した撮影等



1986年アラスカ 光と風の表紙写真は、1995年復刻版(福音館書店)のもです。年譜著作は、星野道夫事務所の協力のもと、編纂しました。

日本 市川市



星野道夫の言葉

写真：星野道夫

私たちはテントの前の雪の上に座り、氷原の彼方に舞う不思議な光を見つめていた。一万数千年前の遠い昔、アジアから渡って来たモンゴロイドの人々もまた、こんな夜のように、オーロラの降る下を南へと旅していたのだろうか。

『どんな時代になるのかな…』

ボブは、まだ三歳にもならぬ一人娘の話をした後、ふと咬いた。それは新しい世紀を迎えようとする今、人間がどんな時代を迎えるのだろうかという憂いを含んでいた。

「本当だね…どんな時代になるんだろうかな」

私たちはそれぞれの想いの中で、来るべき時代の風景を捜していた。オーロラは、闇の中に見え隠れする未来のように、北の空に現れては消えていった。

『ジュノー大氷原の夜』森と氷河と鯨』所収



ハーバード氷河

…森の中から母ジカが現れた。シカはゆつくりと草を食べながらトーテムポールの間を移動し、その背後にある大きく落ちくぼんだ草地に入っていた。その十メートル四方の深くぼ地の上を、四本の苔むした丸太がまるで天井のようにかかり、その下でシカはのんびりと草を食べている。ほくはその風景に釘付けとなった。そこはかつてのハイダ族の住居跡だったのだ。人間が消え去り、自然が少しずつ、そして確実にその場所を取り戻してゆく。悲しいというのではない。ただ、「ああ、そうなのか」という、ひれ伏すような感慨があった。

『トーテムポールを捜して』旅をする木』所収

アラスカを旅するようになってからもう十五年になるが、花を撮ろうと真剣に思い始めたのは、この一二年である。これまではいつも大きな対象物に目を奪われてきてしまった。…結婚をして、私の妻が花の世界に身を置いていたこともアラスカの花に対する興味に拍車をかけたかもしれない。とりわけ彼女にとっては、アラスカの自然との出会いは大きかったようである。それは、野の花との出会いでもあった。

『春の訪れ』長い旅の途上』所収

海流

今年3月、クイーンシャーロット島沖やミッドルトン島で、東日本大震災の津波で流された漂流船やサッカーボール、バレーボールが発見された。

星野道夫は『旅をする木』で、クリンギット・インディアン族の伝承を紹介している。それによると、「…海から流れ着いた異人は姉妹に率いられた二つのグループで、そのひとつはクイーンシャーロット島まで南下し、もう一方はその地に留まり原住民と一緒にいた。その人々が現在のハイダ族、クリンギット族の祖先である」ということだ。また、江戸時代、難破して漂流し、アメリカに渡った人々についても書かれていて、古来この海流はたくさんの人々を見知らぬ世界へ運び続けていたのではないかと、とも記している。

悲惨な大震災の津波による出来事ではあるけれど、星野道夫が見つめていた遙かな古代の海流を思い起こさせるものでもあった。

アラスカ基礎

アラスカ州は、アリューシャン列島を含むアメリカ合衆国最北端の州。人口は約70万人で、その半分はアンカレッジ都市圏に住んでいる。人口密度は0.4人/km²でアメリカ合衆国最小(北海道は66人/km²)。州都はジュノー市で、最大都市はアンカレッジ市。北海道の紋別市はフェアバンクス市と姉妹都市である。

●地理

大昔、ベーリング海峡にはベーリングシアという平原が広がっていた。ユーラシア大陸を東進してきたインディアン、エスキモーはこの平原を通り、アラスカに到達した。

アラスカの氷河の総面積は、世界の氷河の半分を占める。広大な大地の北部にはブルックス山脈、南部にはアラスカ山脈が東西に横たわる。ブルックス山脈の北側はツンドラ地域である。アラスカ山脈中央には北米大陸最高峰のマッキンレー山(標高6194m)がそびえ、周囲には広大なデナリ国立公園が広がっている。これらの山脈に挟まれた中央アラスカには、カナダを源流としベーリング海に至る長大なユーコン川が流れている。アラスカ州内での最高および最低気温はフェアバンクスの周辺で観測されていて、夏は30℃台前半から半ば、冬はマイナス5℃以下となる。降水は稀。

●歴史

アラスカは1867年にロシア帝国からアメリカ合衆国が買収した。1896年ころカナダのユーコン準州、アラスカのノームやジュノー、フェアバンクスで金鉱が発見され、ゴールドラッシュが始まり、何万人もの金探鉱者が集まった。

●民族

人種は白人が6%、インディアン、先住民が15%。州の魚はキングサーモン、州の花はワスレナグサ。

〔文〕ヒマラヤ園サバナ

この半島がベーリング海へと延びるわずかに二百五十キロ先には北方アジアが横たわっている。まるでモンゴロイドの遠い故郷を指さすかのよう…。

氷海から押し寄せる霧が、天空に向かってツンドラに立つクジラの骨を優しく撫でていった。風が吹いてくる向こうには遙かなるユーラシア大陸が広がっている。物語の風に吹かれながら、ある想いが心の中にふくらんでいた。ワタリガラスの伝説を捜しに、シベリアへ渡るつもりだ。

〔海の底の住居跡』森と氷河と鯨』所収

北アメリカとユーラシアが陸続きだった約一万八千年前、干上がったベーリング海峡を渡り、インディアン祖先の最初の人々が北方アジアからアラスカにやってきた。最後の氷河期がやっと終わろうとする頃である。悠久な時の流れと共に、彼らは北アメリカ大陸をゆつくりと南下しながら広がってゆくが、その中に南東アラスカの海岸にとどまった人々がいた。後にトーテムポールの文化を築き上げた、クリンギット族とハイダ族である。

〔トーテムポールを捜して』旅をする木』所収

それは、北極圏のあるエスキモーの村を空から撮った写真だった。灰色のベーリング海、どんよりと沈む空、エスキモーの集落…初めは、その写真のもつ光の不思議さにひきつけられたのかもしれない。そのうちに、ぼくはだんだんその村が気にかかり始めていった。

〔中略〕写真のキャプションに、村の名前が書かれていた。シシユマレフ村…この村に手紙を出してみよう。でも誰に？住所は？辞書を開くと、村長にあたる英語が見つかった。住所は、村の名前にアラスカとアメリカを付け加えるしか方法がない。

〔中略〕半年もたったある日、学校から帰ると、一通の外国郵便が届いていた。シシユマレフ村のある家族からの手紙だった。

〔アラスカとの出会い』旅をする木』所収

写真を撮るには

…自然写真を撮るためにもっとも必要なものは何かと聞かれたら、それは対象に対する深い興味だと思う。初めは漠然とした気持ちでいい。花、昆虫、ある種の生き物への興味、山への憧れ、あるいはある土地への想い…。それが何であれ、まず、その対象に対するマイノンドの部分での関わりである。そして次は、その気持ちさをさらに深めていくことが必要になってくる。言い換えれば、どんどん好きになっていくプロセスだ。それが、勉強をしていくことだと思おう。

私の場合も、初めは、本当に漠然としたアラスカへの憧れだった。しかし、この土地を旅するにつれ、さまざまな人々と出会うにつれ、そしてアラスカに関するさまざまな本を読みながら、私はどんどんアラスカに魅かれていったのである。

それは写真の技術とは直接関係がないかもしれない。しかし、その遠まわりなプロセスは、ひとつの対象に対しグロバルな視点を与えていくことになる。つまり、何を視るのか、切り取っていくか、という力である。

〔初出…不詳〕自然写真家という人生〕

緯村直巳：北極圏12,000kmのルート

緯村直巳：北極圏12,000kmのルート



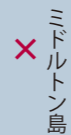
ブルックス山脈



フェアバンクス



カトマイ国立公園



ミッドルトン島

ベーリング海

アリューシャン列島

カナダ

USA
アラスカ州

ツンドラ地域

チュクチ海

北緯66度33分

北極圏

ブルックス山脈

ポーキュパイン川

シーンジエック川

ハント・リバー

コバック川

ユーコン川

アラスカ山脈

マッキンレー山

デナリ国立公園

トコシトナ氷河

タルキートナ

アンカレッジ

南東アラスカ

シトカ

クイーンシャーロット島

〔文〕ヒマラヤ園サバナ

星野道夫と見た風景

星野直子が語る極北の自然といのち

アラスカの自然と動物を撮り続け、極北の地で早世した写真家 星野道夫。その妻 星野直子が、共に歩き見つけたアラスカの風景を、星野道夫の写真とともに語ります。あらゆる国籍、年代の人々を惹きつける、星野道夫の世界に浸り、彼が私たちに伝えなかった自然といのちを見つめます。

トークショー

- ♥お話: 星野直子
- ♥日時: 2012年6月17日(日) 16:00~17:00
- ♥会場: 紀伊國屋書店札幌本店 1F インナーガーデン
- ♥プログラム: 星野道夫のフィールド、年譜の解説と、星野道夫と共に歩き見つけた風景の思い出を、お話します。

スライドと講演

- ♥お話: 星野直子 マンドリン: 松田憲之
- ♥日時: 2012年6月18日(月) 18:30~20:20
- ♥会場: 教育文化会館小ホール
- ♥プログラム: 星野道夫のフィールド、年譜の解説と、共に歩き見つけた風景の思い出を、大画面のスライドを見ながらお話します。また星野道夫の作品のスライドショーを、マンドリン伴奏でおおくりします。

- 協賛: (株)日本レーベン (株)秀岳荘
(株)ノマド ちいさなえほんや ひだまり

- 協力: 新・チベット読書会 手話落語研究会「笑北会」
仏画教室 ボランティアのみなさん

主催: ヒマラヤ圏サパナ

ネパール・チベットの異文化を紹介するN.G.O. 民族音楽公演、講演会、講座、スタディツアーを企画。ヒマラヤ圏の異文化を体験し、日本を振り返る場を企画しています。

- ♥民族芸術 チベットのうたごえ「バイマヤンジンコンサート」 2002年~2011年
ヒマラヤ音楽舞踊公演+ワークショップ(道内、関西公演)
ネパール絵画交流プログラム(ネパール学生と道内学校交流・絵画展)
- ♥スタディツアー …軽トレッキング、ホームステイ、世界遺産古都巡り
ネパール: ヒマラヤを望む軽トレッキング、世界遺産古都を巡り、ホームステイ
チベット: 大草原アムド地方を巡る、ラサ・深山の尼寺を訪ねる、雲南梅里雪山北タイ: 山岳民族の村々を巡り、古都チェンマイを探訪
- ♥講座 外務省共催講演会
「ヒマラヤの国ネパールで今何が起きているのか」特命全権大使(当時)神長善次氏
写真展+講演会「星野道夫と見た風景」星野直子・大谷映芳
ヒマラヤ圏講座、ネパール語講座

〒062-0932 札幌市豊平区平岸2条7丁目1-11-402

☎011-887-9700 ☎090-1309-9799 sapanas387@gmail.com <http://www.sapana.de/>

「星野道夫と見た風景」 ●講演会企画制作: ヒマラヤ圏サパナ ●広報企画制作: ヒマラヤ圏サパナ ●発行: 2012年5月5日

星野道夫 (写真家)

1952年9月27日千葉県市川市生まれ。慶応大学経済学部卒業後、アラスカ大学野生動物管理学部入学。以後、アラスカを生活の基盤にして撮影・執筆活動をする。多くの国内誌をはじめ「National Geographic」などに作品を発表。「アニマ賞」「木村伊兵衛写真賞」受賞。1996年8月8日、取材先のカムチャツカ半島クリル湖畔でヒグマの事故により急逝。享年43歳。



星野直子 (星野道夫事務所 <http://www.michio-hoshino.com/>)

1993年5月に写真家・星野道夫さんと結婚し、同年6月にアラスカのフェアバンクスに移住。1994年、長男誕生。結婚3年後、カムチャツカ半島での事故により、道夫さんを失う。その後「星野道夫事務所」を設立し、道夫さんの写真の紹介を続けている。2005年、新潮社から「星野道夫と見た風景」を刊行。

松田憲之 (マンドリン伴奏)

1971年小樽商科大学マンドリンクラブに加入。マンドリンを始める。在学時に小樽プレクトラム・ソサエティ(アマチュア団体)に加入。1994年プレクトロ・ノルディコ(アマチュア団体)の立ち上げに参加。現在、同団のコンサートマスターを務める。
プレクトロ・ノルディコ <http://homepage3.nifty.com/nordico/>



——— 金子みすゞとレイチェル・カーソンと星野道夫と…… ———

ちいさなえほんや ひだまり

レイチェル・カーソン日本協会会員
JBBY(社団法人 日本国際児童図書評議会)会員
社団法人 日本児童文学者協会会員
ちいさなえほんや ひだまり 代表

青田正徳

営業時間10:00~19:00 営業日: 金、土、日、祝日
〒006-0803 札幌市手稲区新発寒3条4丁目3-20
TEL/FAX 011-695-2120



NOMAD

“ノマド”
それは、遊牧民!
好奇心と共に!

世界各地の山と大自然の旅をご提案いたします。



株式会社ノマド

観光庁長官登録旅行業第1668号/全国旅行業協会正会員
〒060-0062 札幌市中央区南2条西6丁目8-1 閣ビル2階
TEL 011(261)2039 FAX 011(261)1998 info@hokkaido-nomad.co.jp

“ノマド山と秘境の旅2012年5月~12月”ツアーパンフレットをご請求下さい!